

K-869

下小松古墳群 (3)

— 県営ふるさと農道整備事業に伴う永松寺支群の調査 —

2000

川西町教育委員会

下小松古墳群 (3)

— 県営ふるさと農道整備事業に伴う永松寺支群の調査 —

2 0 0 0

川西町教育委員会

序

この本は、平成 11 年度に川西町教育委員会で調査を行なった、県営ふるさと農道整備に伴う下小松古墳群永松寺支群 E-1 ～ E-3 号墳の緊急発掘調査報告書です。遺跡の名称は、当初、仮に雁境古墳群と名付けていたものを、周囲の遺跡や地名との関わりから改称したものです。

これまで、下小松古墳群は薬師沢支群、鷹待場支群、小森山支群の 3 支群 179 基から成り立つ 5 世紀から 6 世紀に造られた古墳群と考えられてきました。今回の調査では、これらの古墳とは別に、4 世紀に築造されたと考えられる 3 基の古墳が確認され、下小松古墳群全体の認識を新たにする必要が生じました。

幸いにも、この遺跡はその重要性から、山形県東南置賜地方事務所の農村整備課を始め、関係機関のご理解とご努力により、保存が計られることになりました。

今後は、この貴重な遺跡を後世に伝えることが、私たちに課せられた責務となります。この本が、今後の文化財保護活動の一助になることを願います。

最後になりましたが、調査に関係されました諸機関、諸氏に厚くお礼を申し上げ序文といたします。

平成 12 年 3 月

川西町教育委員会
教育長 高 橋 勉

例 言

- 1 本書は、ふるさと農道緊急整備事業に係る下小松古墳群永松寺支群E-1～E-3号墳の緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県からの委託により、川西町教育委員会が実施した。
- 3 調査体制は下記の通りである。

調査主体者	川西町教育委員会	教育長	高橋 勉		
調査担当者	川西町教育委員会	文化財専門員	斉藤敏明		
調査参加者	栗田竹二	安部行夫	金子三次	佐藤要蔵	佐藤 保
	江口政志	島貫 忠	金田シヅ	鈴木信子	竹田さえ
	松沢みつよ	安部悦子	須貝文夫	高橋正子	青木多恵子
	鈴木ひろ美				
調査事務局	川西町教育委員会	社会教育課長	竹田利雄		
調査協力	社団法人東置賜シルバー人材センター				
	東北芸術工科大学				
- 4 現地調査では以下の方々の指導を受けた。(敬称略)

新井 悟	茨木光裕	坂井秀弥	佐藤庄一
渋谷孝雄	手塚 孝	吉野一郎	
- 5 出土遺物のうち鉄製品については、東北芸術工科大学に保存処理を依頼し、松井敏也助手からは多くの教示を受けた。
- 6 本書に掲載した実測図は、斉藤敏明、高橋正子、青木多恵子、鈴木ひろ美がそれぞれ分担して作成したものを、斉藤、鈴木がトレースし、写真は斉藤が撮影した。
- 7 本文の執筆は1章から4章までは斉藤が行い、付章については松井敏也氏に依頼したレポートを掲載した。
- 8 本書に収録した遺物は川西町教育委員会に保管してある。

目 次

第1章 調査の経緯	
1 調査に至る経緯	7
2 遺跡の名称について	7
第2章 遺跡の環境	
1 遺跡の立地	9
2 周辺の遺跡	10
第3章 発掘調査	
1 調査の方法	12
2 調査の経過	12
3 発掘調査	
①E-1号墳の調査	13
②E-2号墳の調査	18
③E-3号墳の調査	23
④その他の調査区	24
第4章 ま と め	
1 下小松古墳群の認識の変遷について	28
2 遺跡の年代について	30
付 章 下小松古墳群永松寺支群出土の鉄製品について	31
報告書抄録	36

挿 図 目 次

第1図 E-1・E-2・E-3号墳の立地	10
第2図 周辺の遺跡	11
第3図 E-1号墳墳丘平面図・立面図	14
第4図 E-1号墳調査区配置図・断面図	15
第5図 E-1号墳主体部平面図・断面図	16
第6図 E-1号墳出土遺物	17
第7図 E-2号墳墳丘平面図・立面図	19
第8図 E-2号墳調査区配置図・断面図	21
第9図 E-2号墳出土遺物	23
第10図 E-3号墳墳丘平面図・立面図	25
第11図 E-3号墳調査区配置図・断面図	27

写真図版目次

pl. 1 遺跡遠景、調査前状況
pl. 2 旧長堀、E-1号墳調査状況①
pl. 3 E-1号墳調査状況②
pl. 4 E-1号墳調査状況③
pl. 5 E-1号墳調査状況④
pl. 6 E-1号墳完掘状況、E-2号墳調査状況①
pl. 7 E-2号墳調査状況②
pl. 8 E-2号墳調査状況③
pl. 9 E-2号墳調査状況④
pl. 10 E-2号墳調査状況⑤、完掘状況
pl. 11 E-3号墳調査状況①
pl. 12 E-3号墳調査状況②
pl. 13 E-3号墳調査状況③、完掘状況、出土遺物

第1章 調査の経緯

1 調査に至る経緯

本遺跡は、平成10年度に発見された新規の遺跡である。

山形県は、平成11年度の事業として、川西町下小松地区から飯豊町添川地区へ抜けるふるさと農道の緊急整備事業を計画していた。山形県文化財課ではこれを受けて平成10年12月、山形県東南置賜地方事務所農村整備課の立会のもと路線地内の遺跡詳細分布確認調査を行なったところ、路線地内の丘陵中で3基の墳丘の存在を確認した。

踏査当時の現状で墳丘は非常に低平であり、規模も大きくないことから、古墳の可能性はあるとしながらも中世の塚と判断し、名称も農道の工区の名称から「雁境塚群」として、翌11年度に発掘調査を行なうこととした。

発掘調査の取り扱いについては山形県教育委員会文化財課と川西町教育委員会社会教育課で協議し、山形県から川西町へ委託することとし、平成11年4月1日付けで、『平成11年度山形県農林事業「ふるさと農道緊急整備事業雁境地区」にかかる雁境塚群発掘調査』契約を締結した。期間は1年間である。

2 遺跡の名称について

発掘調査の進展とともに、遺跡の名称については、正確な地名を冠していないこと、「塚(群)」とした遺跡の性格も、土師器の出土などにより「古墳(群)」であることが明らかになった。よって調査の途上より遺跡名を「雁境古墳群」(仮称)としてきた。この名称については、現地説明会までの呼称とし、最終的には、周辺古墳との関連とこれまでの研究史を鑑み、1号墳に下小松古墳群永松寺支群E-1号墳、2号墳にE-2号墳、3号墳にE-3号墳の名称を付与した。本報告でもこれを用いるものとし、今後もこの名称で統一する。

なお、「永松寺支群」の呼称は、昭和59年に川西町教育委員会より刊行された『分布調査報告書』にみられるが、この報告においては、今回調査した3基については記載がない。また、この報告で永松寺支群として番号を付与したものについても現在番号と墳丘を同定することが困難な状況にある。今回の3基の古墳に付与した番号は、平成11年の秋季に周辺地域の古墳分布を確認した結果を受けて全く新たに与えたものである。

下小松古墳群については、平成11年5月に国史跡とするよう答申されているが、この範

囲は薬師沢支群、鷹待場支群、小森山支群の3支群で、今回調査した永松寺支群は含まれていない。

第2章 遺跡の環境

1 遺跡の立地

本遺跡は、山形県東置賜郡川西町大字下小松字竈ガ沢に所在し、川西町の北部、国道287号線の西200m程の丘陵端部に位置している。標高は最高点で約233mであり、田面からの比高差は約15mである。

山形県の南部に位置する置賜盆地は、周囲を吾妻、飯豊、朝日の2000m前後の山岳と奥羽山脈、白鷹丘陵に囲まれた盆地で、吾妻山系に端を発する最上川(松川)により発達した東半を米沢盆地、飯豊山系より流れる白川により発達した西半を長井盆地としばしば呼び分ける。遺跡の所在する米沢盆地は南北約20km、東西約13kmの広さで標高は平均でおよそ220mである。

下小松古墳群永松寺支群は、米沢盆地の西縁、南の山岳地帯から北に派生する玉庭丘陵の北端、米沢盆地と長井盆地の境をなす通称眺山丘陵の東面に存在する。最上川の支流、犬川左岸の丘陵中にあたり、永松寺支群の約600m南から南北1km、東西0.8kmの範囲にわたって国史跡範囲となる下小松古墳群薬師沢支群、鷹待場支群、小森山支群と5世紀から6世紀にかけて築造された古墳が集中する。

今回確認された3基の古墳は、眺山丘陵の主脈から弧を描くように東から南東に延びる支脈にあって、下小松古墳群の薬師沢支群とは沢を挟んで北に対峙する丘陵にあたる。この尾根が標高を下げながらさらに小さな尾根を分けていくなかで、標高230m付近で東に分化する顕著な小尾根の稜線上に3基の古墳がほぼ等間隔に並列しており、これを西からE-1号墳、E-2号墳、E-3号墳とした。墳頂部の標高はE-1号墳が233.0m、E-2号墳が232.0m、E-3号墳が230.4mで、東に行くにつれごく緩やかに標高を下げる。E-1号墳の西も若干標高が低くなっており、この小尾根の最高所にE-1号墳は築かれていることになる。これら3基の古墳は、互いに切り合うことなく秩序を持って立地する。

江戸時代には、この小尾根の裾を削りながら、東に回り込むように用水路が開削されており、尾根の北面と南面の傾斜は現況よりも緩かったと考えられる。また、この開削の影響でE-3号墳の北側が削平されている。

さらに昭和50年代には尾根を迂回していた用水路にバイパス的な水路が設けられ、古墳の展開する小尾根の付根部分が開削されてE-1号墳の西半が失われている。

第3章 発掘調査

1 調査の方法

調査は、対象区域の平面測量を行なったのち、墳丘を中心に設定した調査区と4箇所のトレンチにおいて発掘を行なった。

墳丘を中心に設定した調査区は、十字にセクションベルトを設け、調査区を4分割(1号墳は2分割)し、セクションベルトに接する部分を50センチ幅で地山が確認できるまで掘り下げた。墳丘のそのほかの部分については、任意にトレンチを設定しながらも、基本的には表土の除去に止めた。墳頂部については、主体部の確認を目的とする2メートル四方のグリッドを設定し数ヶ所掘り下げた。

墳丘外の4箇所のトレンチは、古墳に関連する遺構の有無を確認するために設定した。

2 調査の経過

本遺跡の調査は、平成11年4月22日より同年6月28日まで、現場作業の延べ日数は29日間であった。経過は以下の通りである。

- 4月22日 現地入り 測量杭打ち
- 23日 現況測量図の作成着手
- 5月6日 発掘開始
- 25日 E-2号墳より4世紀代の土師器出土
- 28日 明治大学新井悟講師調査指導の為来跡
- 6月1日 山形県文化財課渋谷主査来跡
- 2日 E-1号墳墓壙内より鉄製品出土
- 7日 山形県文化財課佐藤文化財専門員、荒木文化財係長来跡
- 18日 文化庁記念物課坂井調査官来跡
- 26日 山形県農村整備課と保存協議、農道のルート変更決まる
- 28日 現地説明会 地元住民約50名

3 発掘調査

①E-1号墳

E-1号墳は、現存する尾根の最高部、標高233.0mに立地する。墳丘の西南半は昭和50年代の農業用水路の敷設の際に消失し、また、北端も急傾斜の崖線になって古墳の旧状は保たれていない。そのうえ、近年には墳頂部に簡素な小屋が建てられており、墳頂部も多少削平されていると考えられる。

調査前の状況としては、墳丘の東斜面が辛うじて墳丘の存在を示唆している程度で、周溝の痕跡などを認めることはできなかった。また、北側の崖線には、主体部の断面が明瞭に現われていた。

墳丘

E-1号墳は、南北が復元で12.0m、東西不明、高さ0.9mの円墳で、墳丘は無段で埴輪、葺石などの外表施設は認められない。

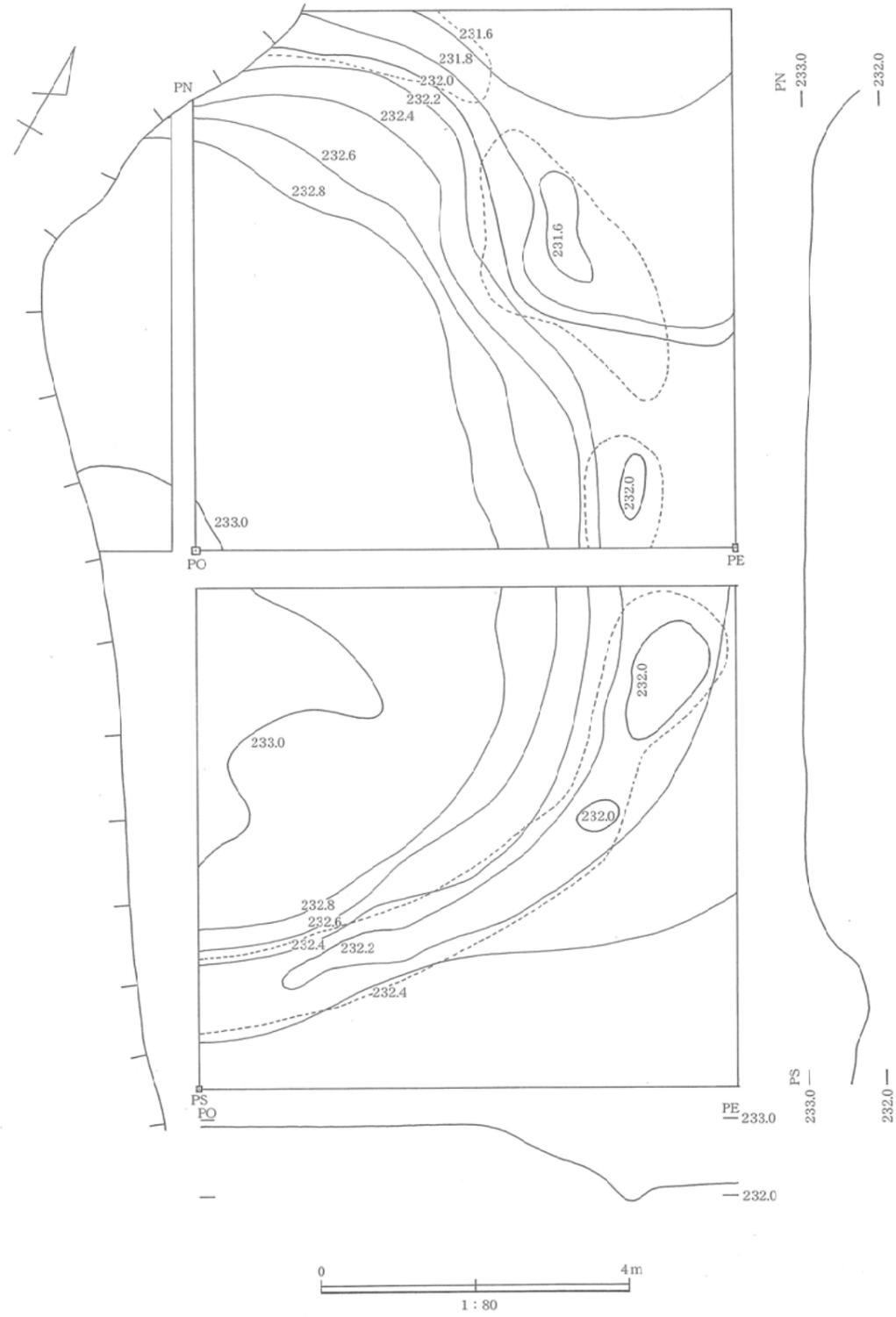
墳丘は南北と東側の3方向を断ち割った。どの部分でも盛り土は20cm程度と非常に薄く、ほぼ均一な土質で分層することは困難である。盛土は赤色で強い粘性の土に白色の粒状になった粘土が混入するもので、墳丘周辺の地山の土を利用していることが明らかである。

周溝は存在するが、全周しない。尾根の稜線方向である北東部分が大きく途切れ、その間に短い溝状の掘り込みがある。周溝の幅は平均して1m程である。深さは均一でなく部分的にピット状に深くなる箇所がある。遺物は堆積土中から土師器片がごくわずかに出土する程度で、総量は非常に少なく復元できるものもない。北東部分の短い溝状の掘り込みは長さ4m、幅1.5m程で、墳丘に食い込むように掘られて深さも他の場所より著しく深い。底に近い堆積土中からは土師器の壺の小破片が出土しているが、数量は僅かで墳丘上から転落したものと考えられる。この掘り込みは墳丘の完成後に二次的に掘り込まれたものと理解できるが、遺物の出土状況からその時期差は殆どないものといえる。

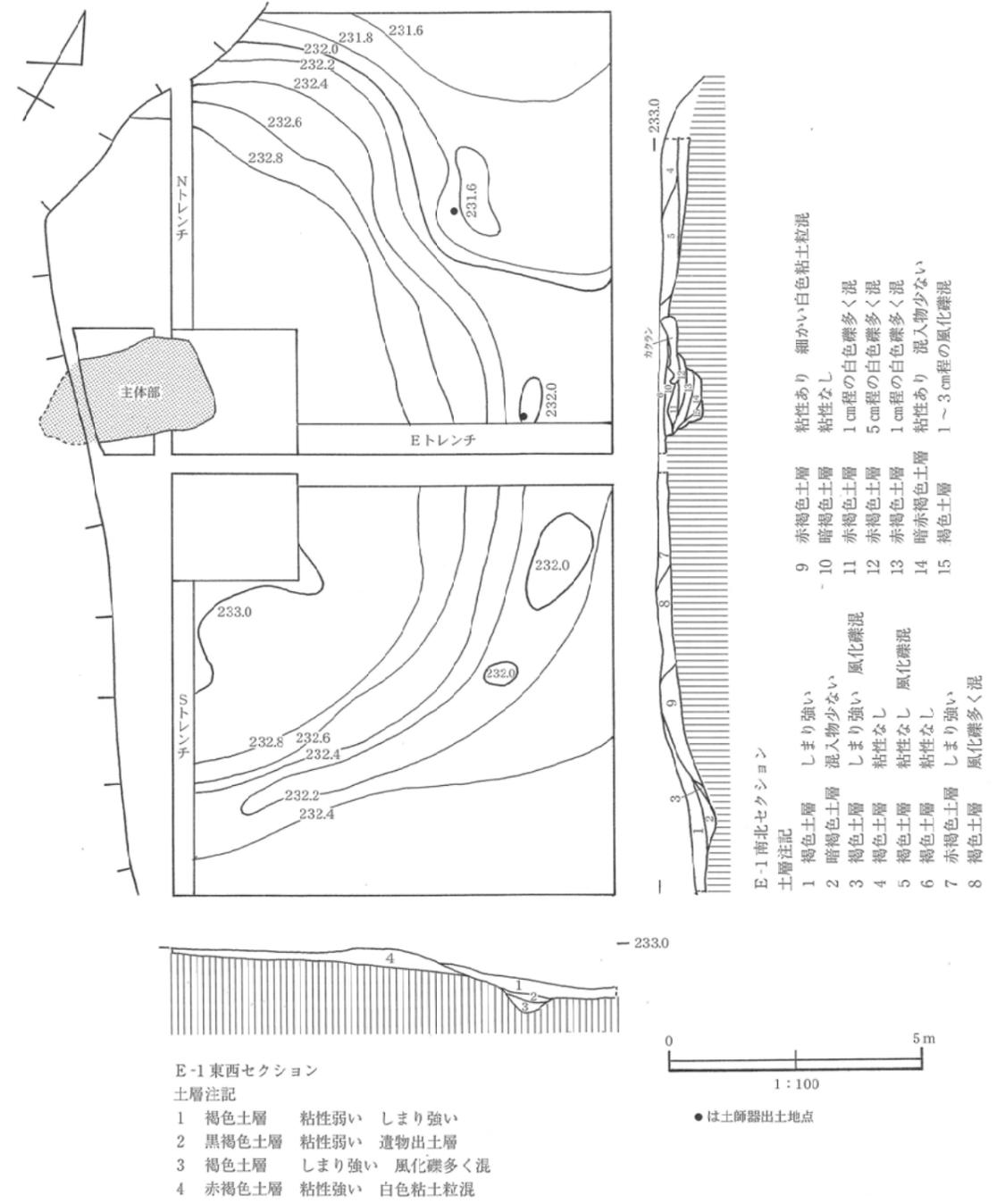
主体部

主体部は墳丘の中央に設けられた木棺直葬で主軸方位はN-49°-Eである。西端については墳丘とともに削られており現存しない。

墓壙は地山を直接掘り込んでおり規模は長軸2.85m以上、短軸1.35mで掘り込み面からの深さは0.6mである。墓壙の壁面は長軸の南側では垂直に近い角度で落ち込み中程で顕著な段がつくが、北側は約45°の角度を保ちながら緩やかに掘り込まれている。墓壙底



第3図 E-1号墳墳丘平面図・立面図



第4図 E-1号墳調査区配置図・断面図

②E-2号墳

E-2号墳は、E-1号墳の中心から16mほど東に中心があって、標高は232.0mを計る。今回調査を行なった3基の古墳では唯一墳丘が完存している。調査前の踏査時点では、E-2号墳はE-1号墳から東にテラス状に延びる平坦な形状をしていて、西側から墳丘の高さを感じることは全くない状態であった。ただし、東側からはやや斜度をもって立ち上がるのが確認できていた。

墳丘

墳丘は南北12.4m、東西13.2m、東側周溝底からの高さ1.8mのやや台形状を呈する隅丸の方形で、段築や葺石、埴輪は認められない。

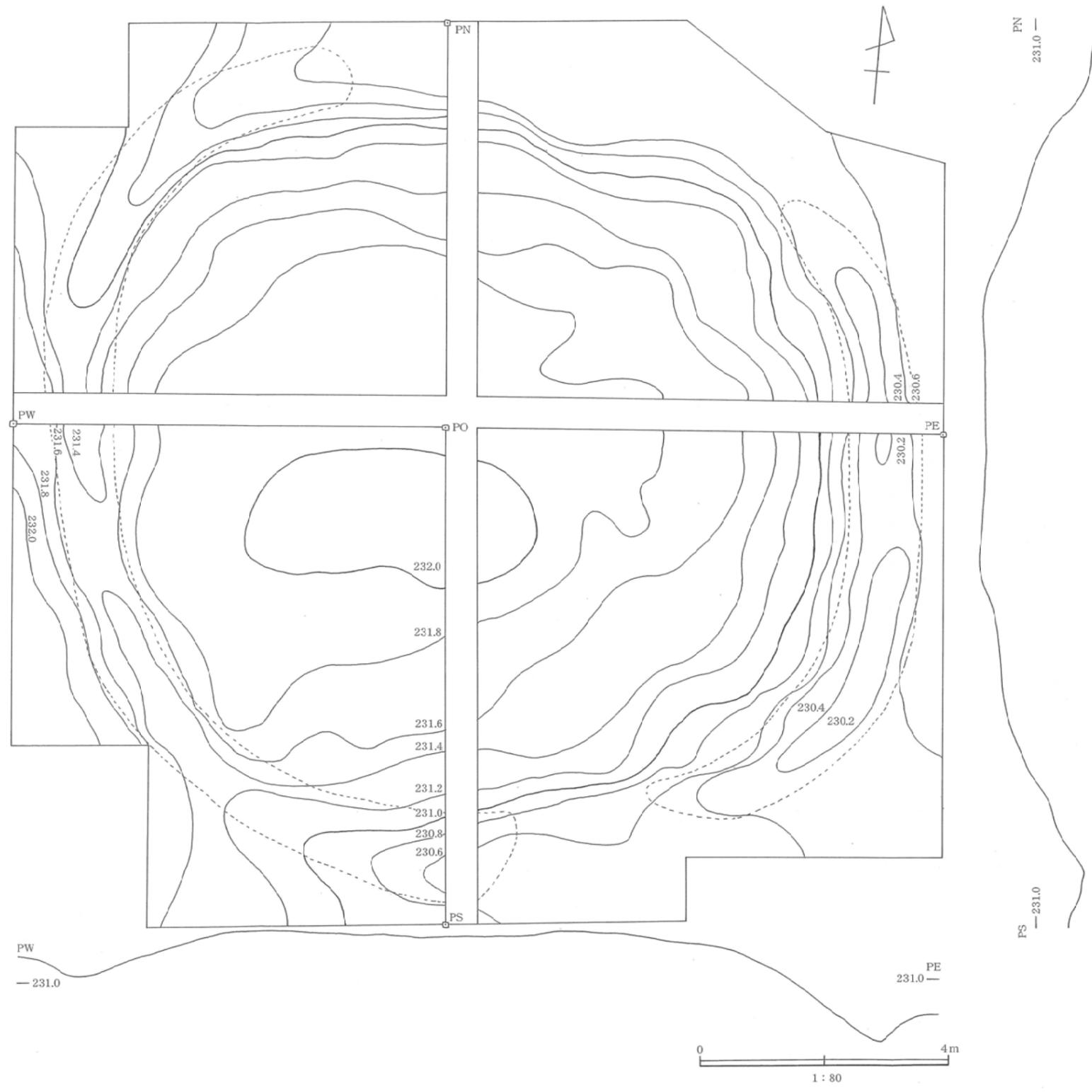
墳丘の盛り土の方法は特徴的で、地山を整形したのち、西側を除く3方の周縁部を土手状に盛り上げている。これは、自然地形が東へ向かって低くなっていること、南北は谷に向かって落ちていることに起因していると考えられ、墳丘の崩落を防ぐための盛り土と判断できる。この後に西側から中央にかけての部分の盛り土を充填している。いずれも、地山の土を利用しているが、周縁部については青灰色の粘土を、西側から中央にかけては赤色で白色粘土の混入する土を主に用いていて、土の使い分けがあったことを指摘できる。このことは平面的にも観察ができ、周縁と中央の盛り土の土質の違いは、主体部のプランと思わせるものがあった。

周溝は西側半分と東面で確認できた。幅は西半が1m、東面で1.2m、堆積土の厚さは西半が40cm、東面で60cmあった。北東と南東の2箇所では墳丘外を平坦に削りだしたいわゆるテラス状に整形されている。これも自然地形との関わりで理解でき、墳裾の傾斜変換は明確である。周溝の堆積土は、自然堆積の黒色土と墳丘の崩落土からなるが、西側の周溝の黒色土中には多くの炭化材が含まれていた。

周溝からの出土遺物は、少量の土師器片と、近世の陶磁器片がある。

主体部

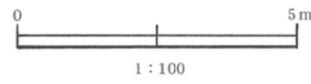
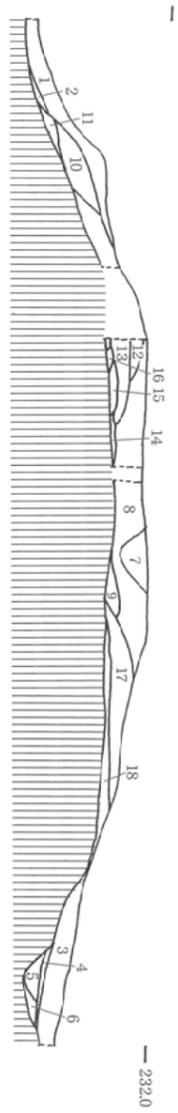
墳丘の中央に設定した調査区で主体部の確認を試みたが、結果的に検出できなかった。検出の方法としては、2×2mのグリッドを4マス設定し、断面観察用のベルトを残しながら、サブトレも設けていずれも地山を若干掘り込むまで掘り下げたが、平面とともに断面でも一様に地山が観察でき、この範囲内では地山が二次的に掘り込まれていないことを確認した。また、墳丘全体を十字に断ち割ったトレンチでも主体部に関わる痕跡は発見できなかった。



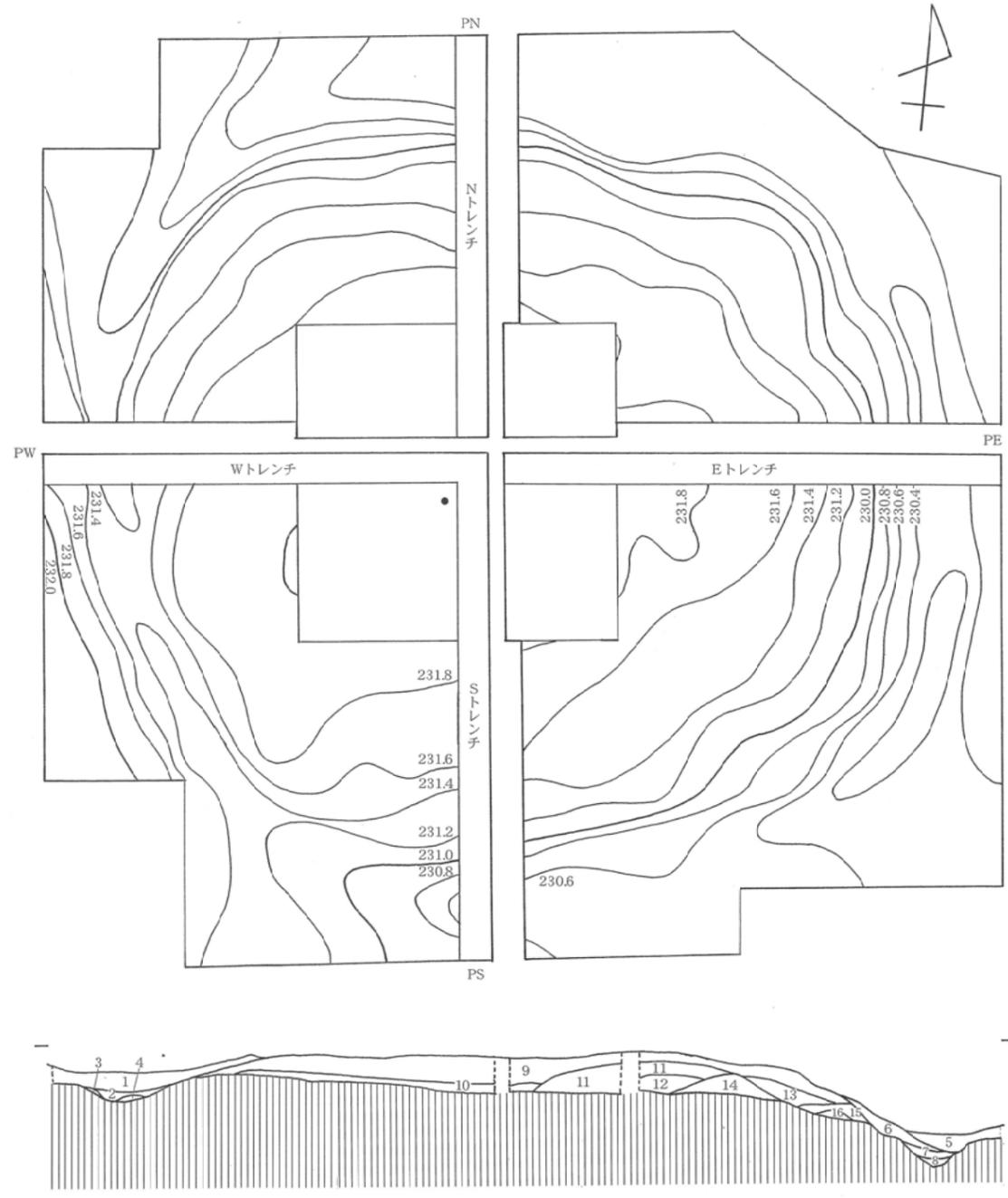
第7图 E-2号墳丘平面图·立面图

E-2南北セクション
土層注記

- | | | |
|----|--------|----------------|
| 1 | 淡赤褐色土層 | 炭化材混 |
| 2 | 暗褐色土層 | 炭化材混 |
| 3 | 暗赤褐色土層 | 炭化材混 |
| 4 | 暗赤褐色土層 | 炭化材混 |
| 5 | 褐色土層 | しまりあり (5層より暗) |
| 6 | 褐色土層 | 炭化材混 砂質 |
| 7 | 暗褐色土層 | しまりあり 炭化材混 |
| 8 | 暗褐色土層 | 粘性あり 白色粘土粒を多く混 |
| 9 | 赤褐色土層 | |
| 10 | 赤褐色土層 | 風化砂礫多く混 |
| 11 | 赤褐色土層 | 黄褐色の風化砂礫混 |
| 12 | 赤褐色土層 | 粘性あり 白色粘土粒混 |
| 13 | 赤褐色土層 | しまりゆるい 粘性なし |
| 14 | 赤褐色土層 | 粘性あり |
| 15 | 淡赤褐色土層 | 黄褐色の風化砂礫混 |
| 16 | 赤褐色土層 | 粘性あり |
| 17 | 褐色土層 | 粘性あり |
| 18 | 暗褐色土層 | しまりゆるい 粘性なし |



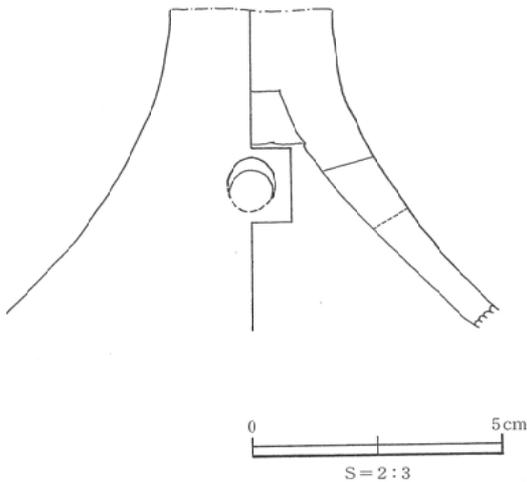
●は土師器出土地点



E-2東西セクション
土層注記

1	褐色土層	しまりあり	混入物少
2	暗褐色土層	粘性弱い	
3	褐色土層	しまりあり	
4	赤褐色土層	地山か	
5	褐色土層	しまりあり	風化礫混
6	赤褐色土層	しまりゆるい	白色粘土粒混
7	暗褐色土層	粘性弱い	
8	暗褐色土層	しまりあり	粘性弱い
9	褐色土層	しまりあり	炭化材混
10	赤褐色土層	しまりあり	混入物少
11	赤褐色土層	しまりあり	炭化材混
12	赤褐色土層	黄褐色の風化砂礫混	
13	褐色土層	しまりなし	根による攪乱
14	褐色土層	風化礫混	
15	暗褐色土層	しまりゆるい	
16	赤褐色土層	しまりあり	粘性あり

第8図 E-2号墳調査区配置図・断面図



第9図 E-2号墳出土遺物

出土遺物

墳丘中央のCグリッドの盛土中、表土下約10cmから土師器高坏の脚部の一部が出土している。形状は脚の上部がやや立ち上がる円錐台状を呈し、裾は欠損している。円窓が2箇所確認でき、位置的に全体では3箇所になるようだ。器面は荒れていて調整は不明確である。

③E-3号墳

E-3号墳はE-2号墳の約22m東に中心があって、標高は230.2mを計る。墳丘のある尾根の北斜面は本来もっと緩やかであったが、江戸時代初期の長掘用水路の掘削の際に削られて、現状を一見するとかなり痩せた尾根に見える。E-3号墳は、もともとの尾根の稜線上に築かれたものであろうが、現状では前述の理由で北側が削平されている。

調査前の段階では、E-2号墳よりもさらに墳丘範囲の識別が困難で、他の2基では比較的判断しやすかった墳丘の東側の裾でさえ、どのあたりに位置するのかは不明確であった。

墳丘

墳丘の規模は南北が現状で10.4m、東西が10.9m、墳丘東裾からの高さが1.7mの方形である。他の2基の古墳同様、墳丘に段築や葺石、埴輪などは認められない。

墳丘の築造方法は、東側で土手状に土を盛った形跡が確認できるが、西側は、後述するように二次的に溝が掘られていて、確認できる部分はほぼ水平に盛土されているだけである。

周溝は確認できない。墳裾は、南面から東面では主に地山をテラス状に整形することで顕在化している。ただし南面では部分的に深くなる箇所があり、ここでは墳丘に対峙する側の立ち上がりが認められる。この面で確認できる墳裾のラインはほぼ東西に直線的である。東裾も明瞭な地山の削り出しが見られ、南北に直線的な傾斜変換のラインが引ける。一方、西面では尾根を断ち割るように幅1.3m、深さ0.7mの溝が直線的に延びている。断面の観察では、この溝が墳丘構築後に掘られたことがわかるが、周辺地形との関係からも墓域と周囲を区画するための溝であることが想像でき、墳丘築造と同時に掘られたもの

と理解できる。

墳丘北面は、多量の盛り土が崩落しており、これらを除去すると地山が急峻に削りだされており、後世に墳丘が破壊されていることが明らかである。

遺物は、墳丘中央の盛土の最下層から土師器の壺胴部片が出土している。

主体部

墳丘の中央に調査区を設定したが、主体部の痕跡を確認することはできなかった。調査区は、調査前の状態から判断した仮の中心を基準に2 m×2 mのグリッドを設定し、断面観察のベルトを残しながら地山まで掘り下げた。はじめa～dの4グリッドを、さらに北と東に適宜拡張区を設けたが、主体部に関わる痕跡を検出することはできなかった。

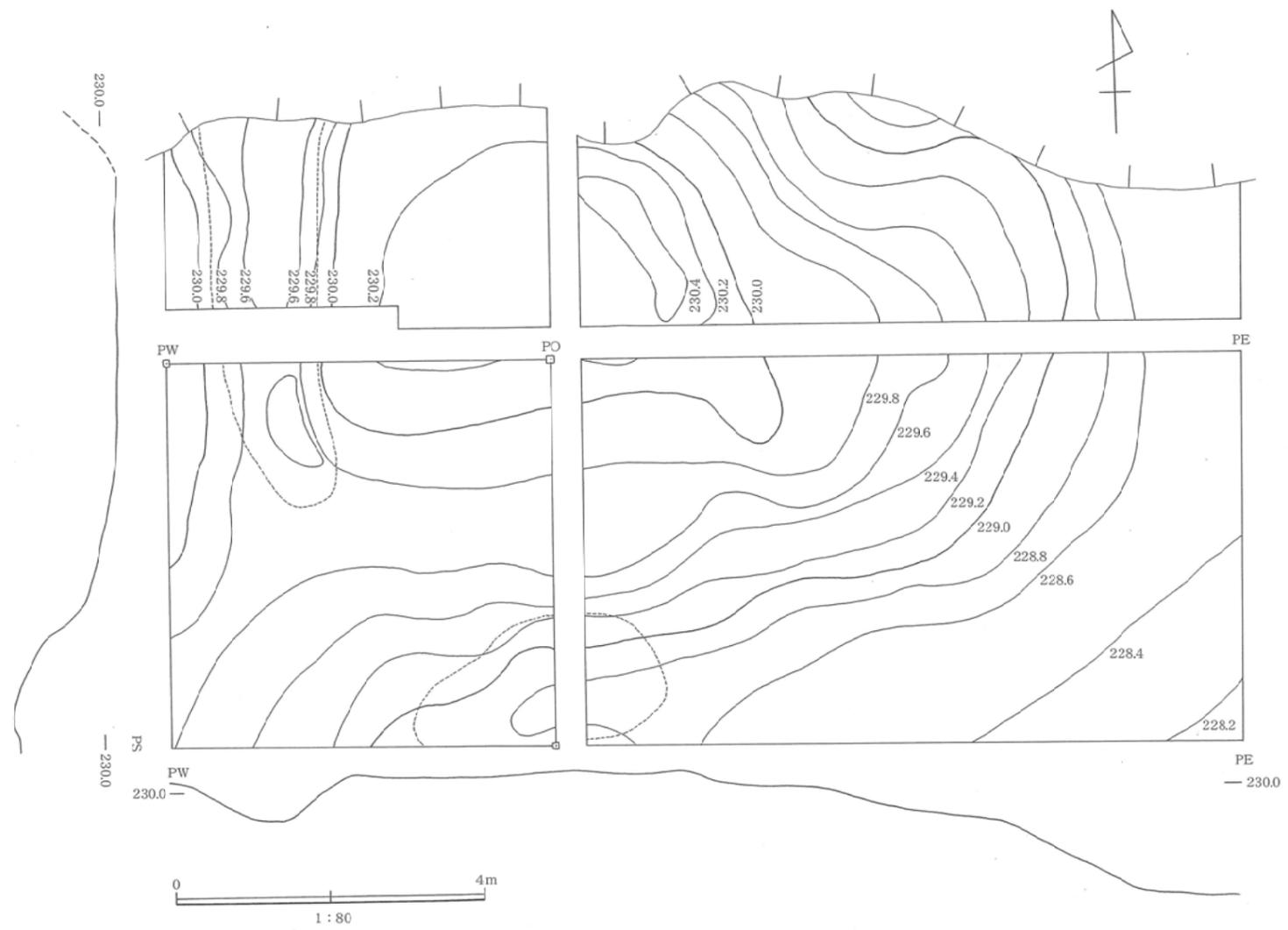
出土遺物

墳頂部aグリッド、表土下40 cmの盛土最下層から出土した土師器壺片がある。高さ12 cm、幅17 cmほどの胴部中央の破片で、円周の1/4弱が残っている。これから推定する胴部の径は約26 cmで、縦断面の形状と合わせ、やや扁平な球形の胴部を復元できる。

外面は黒斑があり、部分的に縦方向のハケメが観察できる。内面の調整は不明である。

④その他の調査区

墳丘外に4箇所のトレンチを設定し、遺構の有無を確認した。1トレンチは、E-1号墳とE-2号墳の間に1 m×4 mの大きさに設定した。遺構は確認されなかったが、土師器の甕と思われる底部が出土した。2-AトレンチはE-2号墳東側の径2 mほどのごく小さい円丘状に見える箇所に2.5 m×3 mの大きさに設定した。結果としてこの円丘は自然の地ぶくれと判断した。出土遺物はなかった。2-BトレンチはE-2号墳の調査区とE-3号墳の調査区の間を50 cm幅で掘った。3トレンチは、E-3号墳の東側の稜線上に1 m×12 mの大きさに設定した。いずれも遺構は認められなかったが、3トレンチの表土中から土師器甕の口縁部片が数片出土した。



第10图 E-3号墳墳丘平面図・立面図

第4章 ま と め

1 下小松古墳群の認識の変遷について

眺山丘陵には従来より数多くの墳丘が存在することが知られていた。そのうち地形的にまとまりを持つ小森山、鷹待場、薬師沢の3つの支群、計179基を、発掘調査の結果と微地形の観察に基づいて古墳と判断し、これらは、下小松古墳群として平成11年に国指定史跡に答申された。

しかしながら今回の調査で、前述のいわゆる「下小松古墳群」以外にも、同じ丘陵中に古墳の存在が知られることとなった。これらは広義で下小松古墳群の範疇に含まれてくるものと考えているが、このことにより、これまでの研究史上で様々な理由から古墳との判断に至らず、下小松古墳群には含んでこなかった墳丘を再検討する必要性が生じてきた。

ここでは、これまでの眺山丘陵中に存在する墳丘群に対する認識を整理し、今後の検討に生かしたい。

眺山丘陵の墳丘群を最初に学術的な興味の対象としたのは、戦前に丘陵を踏査した後藤忠如氏である。後藤氏はその結果を分布図の形にまとめているが、この図にはのちに尼ガ沢支群と名付けられるグループ97基、小森山支群70基、鷹待場支群9基、薬師沢支群52基の墳丘の存在が印されている。

文献に登場するのは1938年に刊行された『東置賜郡史』中の西村眞次氏による「置賜盆地の古代文化」がはじめである。この中では尼ガ沢出土の祝部式系統の甕を論拠に「小松古墳群の築営年代を大体平安時代晩期若しくはそれを稍々下った時代」としている。

高橋堅治氏は1953年の「小松の墳丘群考」で、「雁境峠付近から山沿いに南薬師沢塔ノ峯小森山千松寺山平谷地にかけて数多くの円墳がある」とし、墳丘の存在する範囲を明確に記している。また、舞台山（小森山）山頂の墳丘の配置を図示し、前方後円形の墳墓の存在を示唆しているが、古墳との断定には至らず、結局は西村氏と同様の見解を示している。

1970年代の後半になると川西町でも埋蔵文化財の発掘調査体制ができつつあり、79年には、尼ガ沢支群の墳丘について発掘調査が行なわれた。ここでは一辺5～7mの方形の墳丘が4基調査されたが、いずれも中世の墳墓と供養塚であった。

このような状況下の1983年、川西町教育委員会によって眺山丘陵中の墳丘の分布調査が行なわれた。この調査では墳丘群を地形的に5分し、尼ガ沢支群、小森山支群、薬師沢支群、中間支群、永松寺支群と名付け、合わせて195基の墳丘を確認している。

ただし、尼ガ沢支群については、これまでの調査結果を合わせ、「平安期末から鎌倉期のものが主体」としているが、「丘陵の尾根にあるものと平坦部にあるものがあり、一概にすべての墳丘が同時期とはいきれない」とも報告している。また、永松寺支群については「土壇の可能性はある」「北側斜面にて確認されたもので、このような北側斜面での確認は他の墳丘群にはみられない」との記述が見られる。なお、中間支群とされているのは現在の鷹待場支群である。

これをうけ1985年から、川西町教育委員会は小森山支群K-36(第61)号墳の発掘調査を行なった。この調査では、K-36号墳が6世紀前半の前方後円墳であることが確認され、これらの墳丘群に古墳が含まれることが事実となった。

翌年から2年間で鷹待場支群T-41(第106)号墳、同T-42(第186)号墳、薬師沢支群Y-48(第143)号墳などの調査を行い、それぞれが古墳時代の墳墓であることが確認された。以上の調査によって、川西町教育委員会ではこれまで俎上にあがった尼ガ沢支群、小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群、永松寺支群のうち小森山支群、鷹待場支群、薬師沢支群の3支群を一時的に下小松古墳群とみなすことになった。一方で、調査で中世の遺構が含まれていた尼ガ沢支群と詳しい状況の知れていなかった永松寺支群については無意識的に対象から外れていくことになった。

このうち1993年には、これまで墳丘が確認されていなかった丘陵の北端に近い山形県立総合コロニー希望が丘敷地内に、3基の墳丘が発見された。

そして1998年には、山形県によるふるさと農道緊急整備事業により丘陵中の開発が行なわれることになり、その事前調査として路線予定地内を踏査したところ、今回の墳丘の発見となった。

これまでの経緯を振り返ると、発掘調査を行い古墳であると判断できたものとそれを含む支群の墳丘についてのみ古墳として扱い、古墳群の範囲を決定してきた。今回の調査により、これまで墳丘の存在が知られながらも積極的に古墳と判断しなかったものの中にも少なからずの古墳が含まれる可能性が高まったといえる。

これらについては、1999年秋に再度、分布確認調査を行なった。2000年度に詳しい報告を行なう計画でいるが、北限は山形県立総合コロニー希望が丘の敷地内から南限は長根峠の北、かつて尼ガ沢支群としていた地域まで、部分的に散発ながら、広い範囲で墳丘が確認できた。これらはおおよそ6支群、約200基に及ぶものと考えている。なお、これら、もとより認識されていた3支群以外の墳丘については、2000年度より順次発掘調査を行なって遺跡の年代等の所見を得る予定である。

2 遺跡の年代について

今回の調査によって川西町北西部の丘陵中に確認された3基の墳丘については、全て古墳時代に築造された墳墓であると判断した。主体部の確認という積極的な根拠が得られなかったE-2、E-3号墳についても、地山の整形と墳丘への盛り土、土師器の出土から古墳の可能性を考えることが最も妥当であると考えている。

これらの築造時期を推定する材料としては、E-2号墳出土の土師器高坏がある。円錐台状の脚部がやや直立しながら立ち上がる特徴は、辻秀人によって3期8小期に区分された東北地方南部の土師器編年においてI-1期からII-1期に認められるもので、4世紀前半、古墳時代前期でも早い段階の年代を与えることができる。

また、E-1号墳の主体部から出土しているやりがんなについても、会津や北陸地方で同様の長茎で先端が緩く反り上がるタイプのもを出土している古墳（福島県会津大塚山古墳、石川県小菅波4号墳、石川県分校カン山1号墳など）が知られ、これらの古墳の築造時期とも大きな齟齬は生じない。

ところで、E-1、E-2、E-3の3基の古墳間の時期差の問題については、比較可能な判断材料に乏しい。しかし、墳丘規模や築造方法に顕著な差が認められないこと、小尾根の稜線という古墳の築造に適した地に限られたなかでの秩序ある立地などから大きな時期差の存在を考えることは難しいのではないだろうか。

これによって、これまで鷹待場支群T-41(第106)号墳の5世紀前半という築造年代を、下小松古墳群の築造開始時期とした年代観を、1世紀遡らせることになった。これにより下小松古墳群は4世紀から6世紀にわたって造られ続けた類い稀な群集墳といえることができる。

【引用・参考文献】

- 西村眞次 1937 「置賜盆地の古代文化」『東置賜郡史』上 東置賜郡教育会
高橋堅治 1956 「小松の墳丘群考」『羽陽文化』32 山形県文化財保護協会
川西町教育委員会 1980 『千松寺遺跡発掘調査報告書』
川西町教育委員会 1984 『分布調査報告書』
大塚初重・小林三郎 1995 『下小松古墳群(1)』川西町教育委員会
小林三郎 1999 『下小松古墳群(2)』川西町教育委員会
川西町教育委員会 1984 『天神森古墳』
山形県教育委員会 1997 「(3)カノウ壇遺跡」『分布調査報告書(24)』

付章 下小松古墳群永松寺支群E-1号墳出土鉄製品について

東北芸術工科大学 松井敏也

川西町教育委員会より表記鉄製品の保存処理の依頼があった。そのうちE-2号墳主体部より出土したNo2の鉄製品についておこなった事前観察について報告する。

試料に付着している土とさびを除去した結果、保存処理前の状態(図1)では確認できなかった模様が現れた。写真を図2に示す。それは黒色の生地に格子状に溝を刻みつけた様である。黒色の生地の下には木質部分が観察できた(図3矢印)。その生地の1セクションを採取し、樹脂包埋後研磨した後、断面の顕微鏡観察を行なった。断面の写真を図4に示す。図の上側が観察できる表面にあたる。層は中央で薄く、両端で厚くなっている。さらに拡大した像を図5に示す。

その結果、生地の黒色層は漆である可能性が高い。また、左右の部分(格子状の溝に相当)には繊維の断面と思われる組織が観察できた。矢印で示す。繊維の種類までは同定していない。

この黒色層を赤外線分光分析にて化合物の同定を試みたところ、黒色の部分からは有機質遺物によく見られるC-H結合が確認でき、全体の波形からは漆のピークに近いことがわかった。これより、この黒色層は漆である可能性は高い。しかし生地の木質部分に含まれるセルロース成分も似たような波形を示すため、今回の採取においては同定を避けた。赤外線分光分析による分析スペクトルを図6に示す。

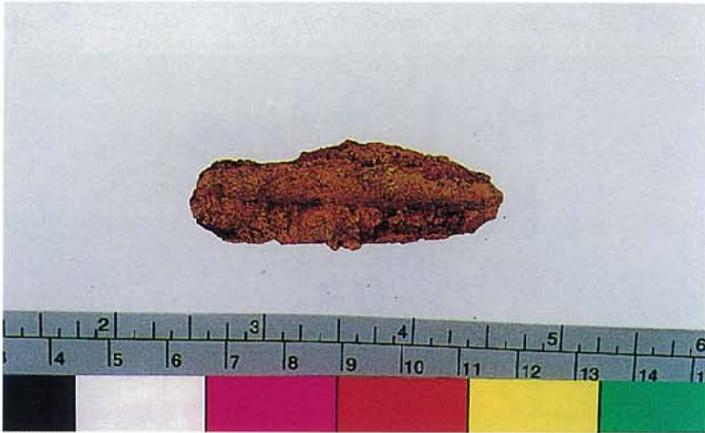


図1 No.2 保存処理前



図2 土の除去後の表面黒色の生地層に格子状の溝が観察



図3 黒色層の下に観察される木質部(矢印)

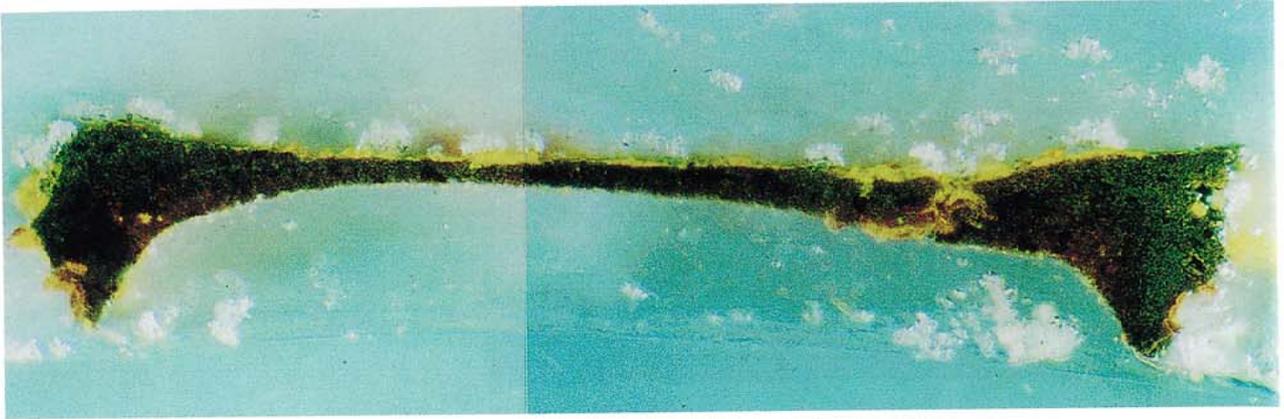


図4 黒色層の1セクション（溝から溝まで）の写真

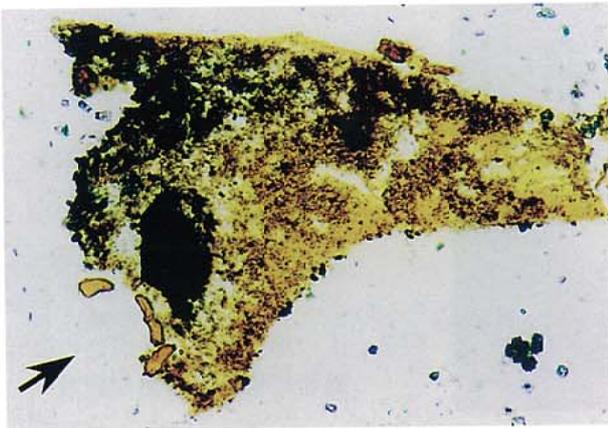
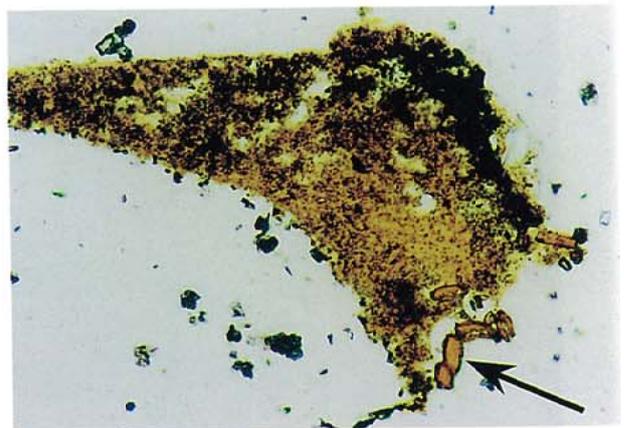
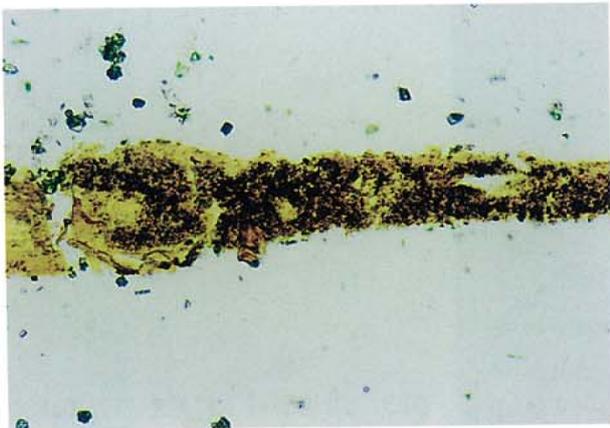


図5

左) 断面の左側の溝付近

左下) 断面中央付近の均質な層

右下) 断面の右側部分



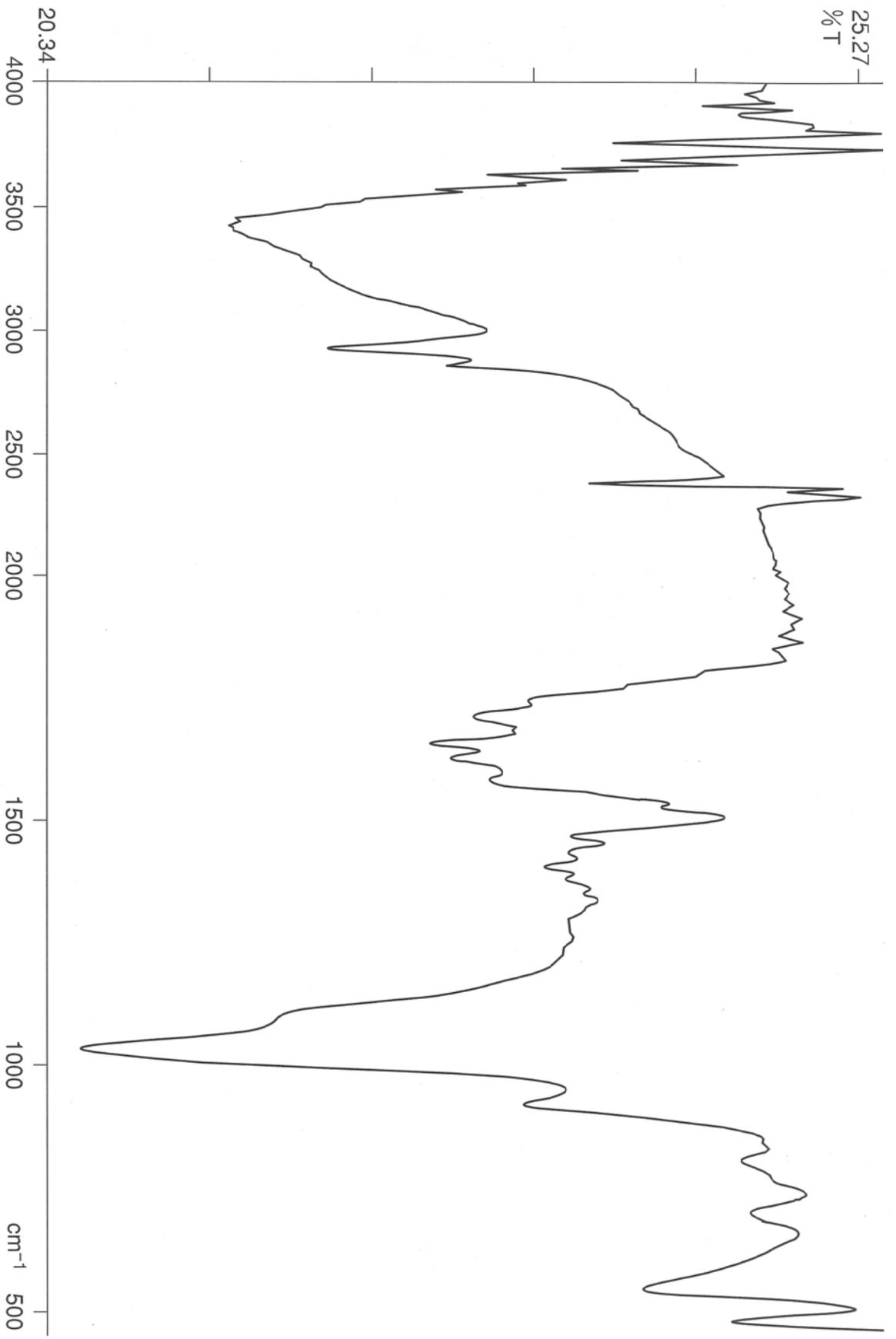


図 6 黒色層の赤外線分光分析による分析スペクトル

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもこまつこふんぐん (3)							
書名	下小松古墳群 (3)							
副書名	県営ふるさと農道整備事業に伴う永松寺支群の調査							
巻次								
シリーズ名	川西町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第19集							
編著者名	斉藤敏明							
編集機関	川西町教育委員会							
所在地	〒999-0121 山形県東置賜郡川西町大字上小松 1736-2							
発行年月日	平成12年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しもこまつこふんぐん 下小松古墳群 えいしょうじしぐん 永松寺支群 E-1・E-2・E-3 号墳	やまがたけんひがしおき 山形県東置 賜郡川西町大 あごしもこまつあごかま 字下小松字竈 がさわ ヶ沢	6382		38度 1分 42秒	140度 2分 52秒	19990421～ 19990628	400m ²	県営ふるさと農道整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
下小松古墳群 永松寺支群 E-1・E-2・E-3 号墳	古墳	古墳時代	円墳1、方墳2		土師器、鉄製品		低丘陵上に立地する約200基からなる古墳群の一部。群内で最古の4世紀初頭の土師器が出土。	

写 真 图 版

pl.1 遺跡遠景、調査前状況



1 遺跡遠景（東より）



2 遺跡遠景（北より）



3 調査前状況（西より）

pl.2 旧長堀、E-1号墳調査状況①



4 尾根北側の旧長堀（東より）



5 尾根南側の旧長堀（東より）



6 E-1号墳全景（東より）

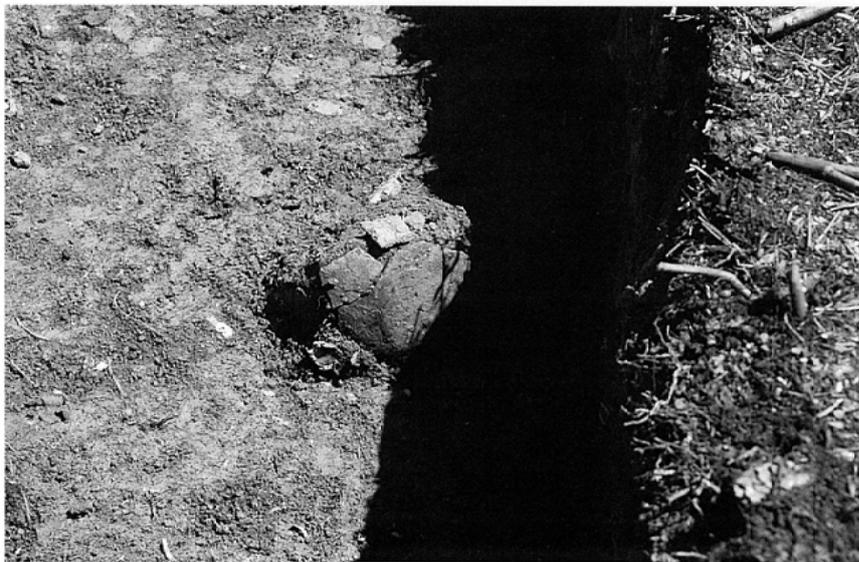
pl.3 E-1号墳調査状況②



7 E-1号墳表土剥離状況（東より）

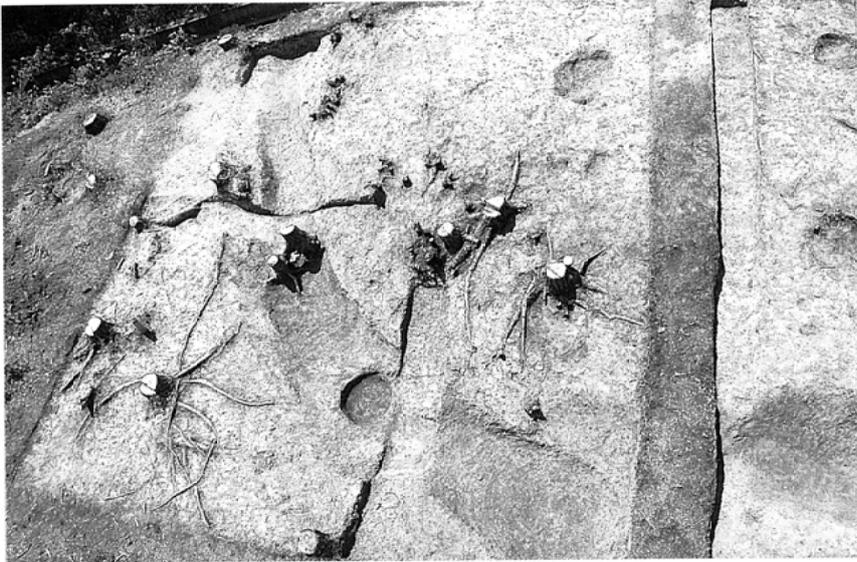


8 E-1号墳東裾セクション（北より）



9 E-1号墳東裾遺物出土状況

pl.4 E-1号墳調査状況③



10 E-1号墳東裾周溝



11 E-1号墳北裾周溝



12 E-1号墳主体部完掘状況(東より)

pl.5 E-1号墳調査状況④



13 E-1号墳主体部長軸セクション（北より）



14 E-1号墳主体部短軸セクション（東より）

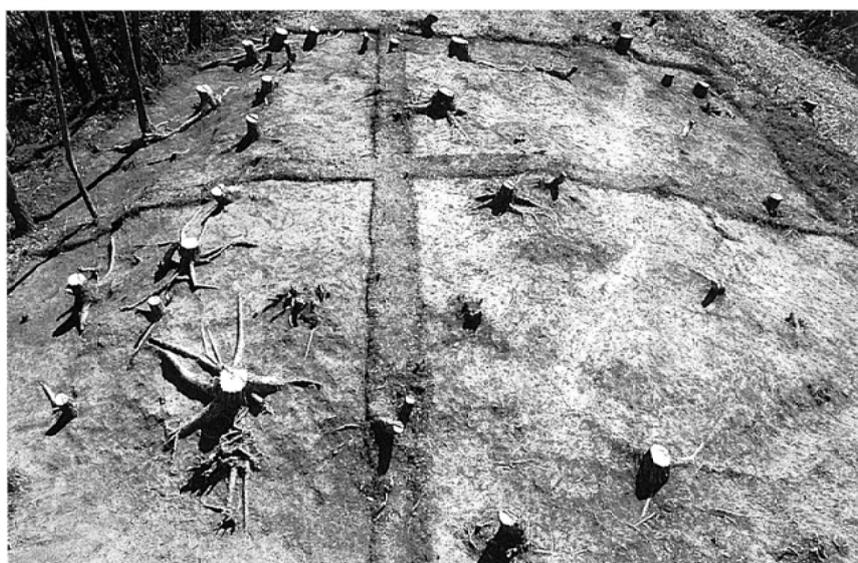


15 E-1号墳主体部遺物出土状況

pl.6 E-1号墳完掘状況、E-2号墳調査状況①



16 E-1号墳完掘状況（東より）



17 E-2号墳表土剥離状況（西より）



18 E-2号墳東裾セクション（南より）

pl.7 E-2号墳調査状況②



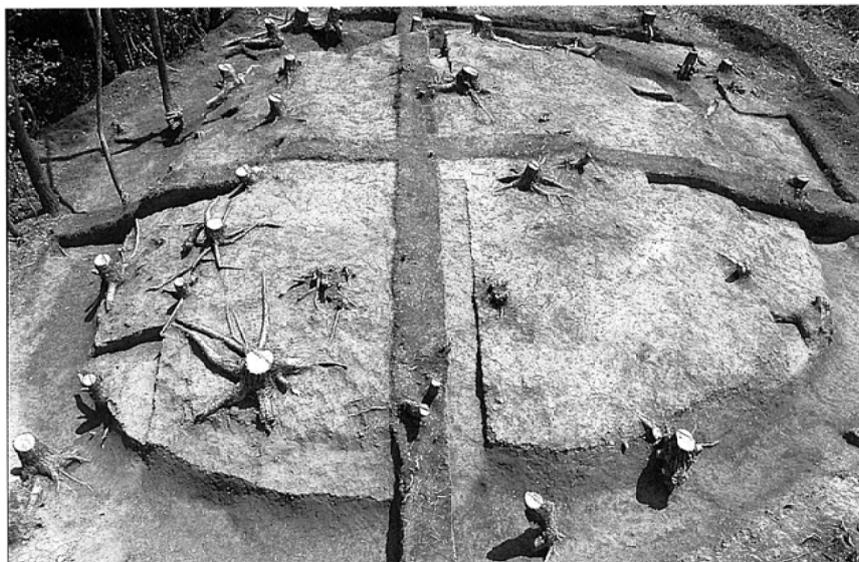
19 E-2号墳西裾セクション (南より)



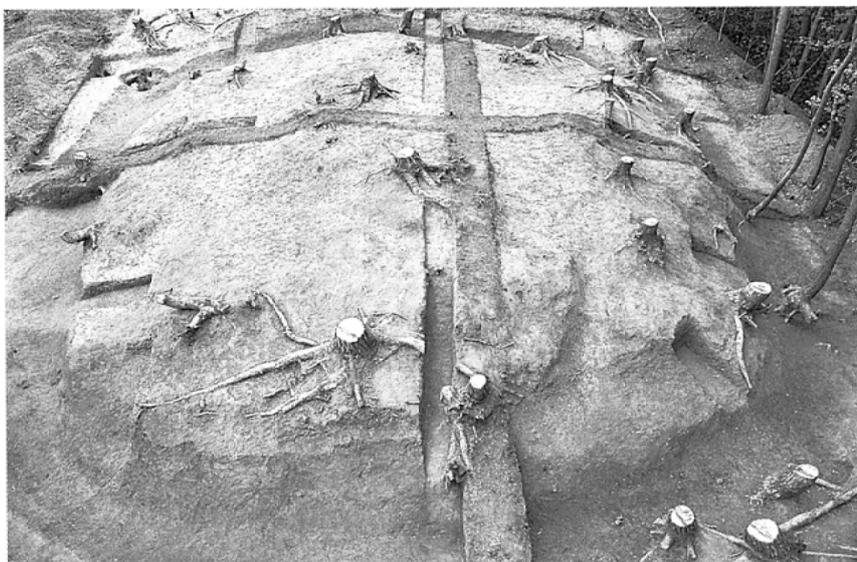
20 E-2号墳南裾セクション (西より)



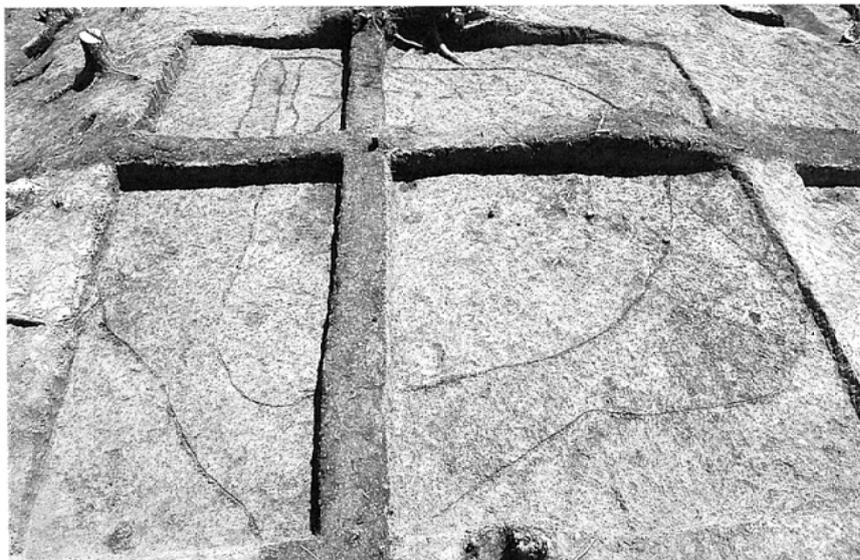
21 E-2号墳北裾セクション (西より)



22 E-2号墳周溝完掘状況（西より）



23 E-2号墳周溝完掘状況（東より）



24 E-2号墳墳頂調査区設定状況（西より）

pl.9 E-2号墳調査状況④



25 E-2号墳墳頂調査区遺物出土状況



26 E-2号墳墳頂南北セクション (西より)



27 E-2号墳墳頂東西セクション1 (南より)



28 E-2号墳墳頂東西セクション2 (南より)



29 E-2号墳完掘状況 (西より)



30 E-2号墳完掘状況 (東より)



31 E-3号墳表土剥離状況（西より）



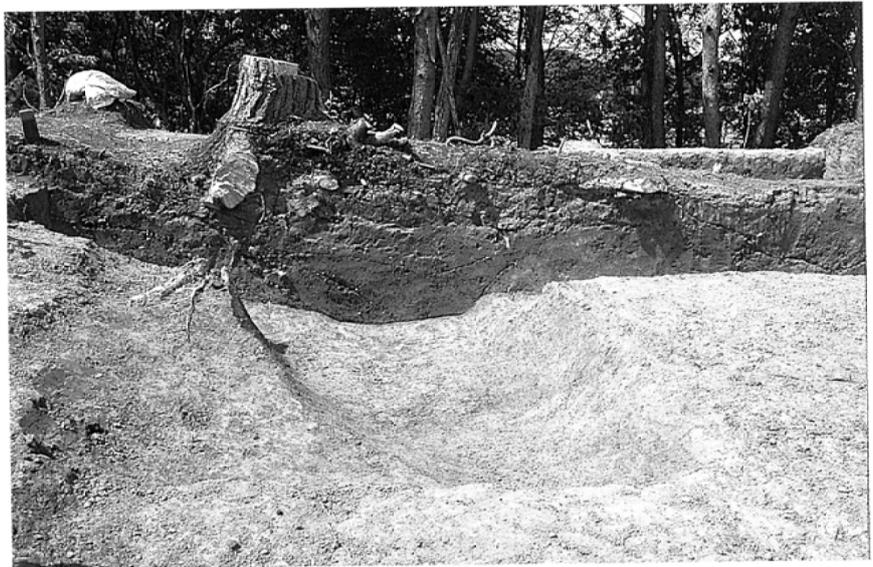
32 E-3号墳西裾セクション（南より）



33 E-3号墳東裾セクション（南より）



34 E-3号墳墳丘北斜面削平状況（西より）



35 E-3号墳西側周溝セクション（南より）

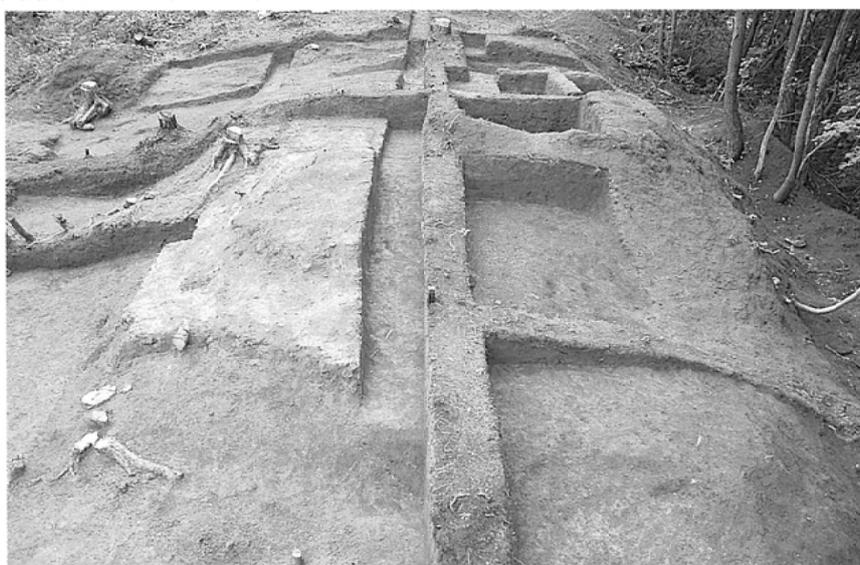


36 E-3号墳墳頂遺物出土状況

pl.13 E-3号墳調査状況③、完掘状況、出土遺物



37 E-3号墳完掘状況（西より）



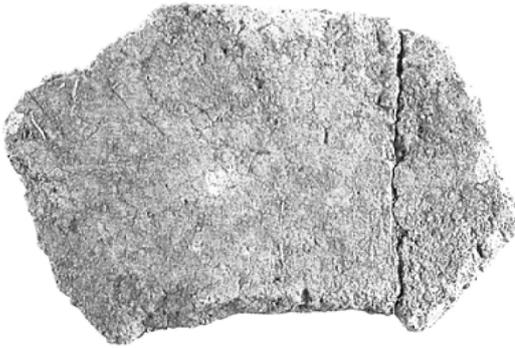
38 E-3号墳完掘状況（東より）



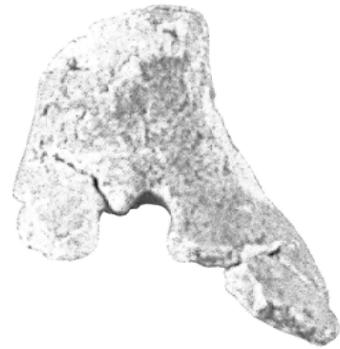
1 壺底部



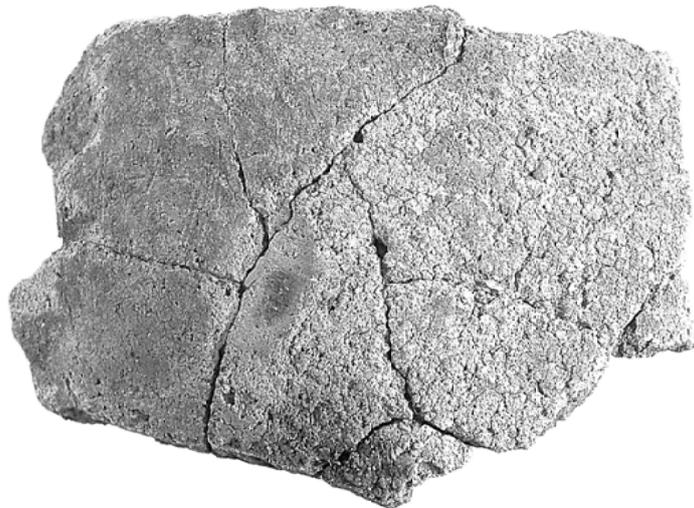
2 壺底部底面 (1 と同一物)



3 壺口縁部



4 高杯脚部



5 壺胴部

39 出土遺物 (1~3 : E-1号墳出土 4 : E-2号墳出土 5 : E-3号墳出土)

下小松古墳群 (3)

—県営ふるさと農道整備に伴う永松寺支群の調査—

発行 平成12年3月

発行者 川西町教育委員会
〒999-0121
山形県東置賜郡川西町大字上小松 1736-2
0238-42-2111

印刷 榊芳文社よねざわ印刷
